

総合人間学会設立の背景と発展

The Background and Development of the Japan Association of Synthetic Anthropology

尾関 周二

OZEKI, Shuji

はじめに

この論考は、研究談話委員会主催による総合人間学会研究会（2018年12月15日 於：明治大学）において、当日にはパワーポイントで行った報告を、研究談話委員会の古沢広祐委員長からの要請で文章化したものである。文章化に伴う若干の加筆修正はあるが、大きな変更はない。前半は、総合人間学会の設立に至る過程や時代背景を述べて、それを踏まえて「設立趣意書」が執筆された経緯を明らかにする。後半は、趣意書の内容のポイントやそれ以降10年余が経って改訂版として「総合人間学会趣旨新版（2019）」が著わされたことにふれる。最後に、その時点での私の現代社会の理解と未来構想についてごく簡単にふれた。

§1 学会設立へ向けての流れ

学会設立に至る経過を簡単にまずふれておこう。

（1）「人間学研究所」の時代

かなり以前から小原秀雄さん、柴田義松さんなどが中心になって設立した「人間学研究所」という形で、佐竹幸一さんの小さなビルの一室で定期的な研究会や講演会が行われてきた。山手線の新大久保駅から歩いて5分ほどの好立地のビルであった。これへの私の参加は途中からであったので、いつ始まったのか、知らない。佐竹さんは、実業家であったが、人間学に関心を持ち、自らの人間学を「実用人間学」と呼んで、その部屋には所狭ましと人間学関係の本が集めてあった。

（2）「総合人間学研究会」の時代（2002年～2006年）

小原さんと小林さんがお互いの問題意識に共感し、人間学研究所を基礎にしながらもそれとは、別に「総合人間学研究会」を設立した。小林、小原、柴田さんが代表幹事で、それに実務面で岩田好宏さんが中心になって、堀尾輝久さんや私なども幹事として参加して定例の研究会が主に講演会形式で開催された。小林さんや小原さんの知人・友人を中心に多くの方々に講演を依頼した。私の記憶によく残っているのは、精神分析学で著名な木村敏さんの講演

であった。京都から招待して交通費を支払うだけの感じだったので、演者も少々驚かれたようだったが、小林直樹さんの顔に免じてご理解をいただいた。

この研究会はおよそ20回開催され、そのうち、7回はシンポジウムで、後の13回は例会であった。その成果として小林・小原・柴田編著『シリーズ 総合人間学』3巻本が発刊された。この発刊に関しては、小林さんが大変熱心で、私も頼まれて、第1巻と第2巻に合わせて論文二本書いた。

こういった用意周到な準備を経て、総合人間学会の設立（2006年5月27日）に至ることになるが、それに先立つ最後の研究会は第19回研究会（第7回シンポジウム）として開催されたので、その内容を少し紹介しておこう。シンポジウムのタイトルと演者は、当時の研究会の中心メンバーの5人で、以下のようである。

「21世紀、総合人間学は何をめざすのか――人間の危機、人類の危機に際し、3年の研究を経て、私たちの『知』の課題を提出する」

1. 小原秀雄「現代環境の危機と人間」
2. 柴田義松「子どもと教育の危機と人間学」
3. 長野敬「バイオ・エシクスの問題」
4. 尾関周二「人間性の基礎としての〈自然さ〉」
5. 小林直樹「総合人間学の課題」

§2 学会設立への情熱

この学会の設立には、小林先生と小原先生の意気投合によって生まれた年齢を超えた若々しいお二人の学問的情熱が大きな動因だったと思う。実際、小林直樹（1921年～2020年）は学会設立時85歳であり、小原秀雄（1927年～）で、設立時79歳だったことからも理解されるように、いわば「後期高齢者」の年齢からこの学会設立の事業に取り掛かった。このことは驚くべきと言わざるをえないだろう。

小林先生は、著名な憲法学者で、一貫して平和憲法を擁護する論陣をはった。小林先生によれば、若い頃の哲学・人間学関心が小原先生との出会いによって再燃したということであった。これは、小原先生が動物学者であっただけでなく、社会的問題にも深い関心をもっておられ、人文・社会科学と生物学の統合への関心があったことと関係しているであろう。以下にお二人の特徴について私が感じたところを箇条書きに記しておきたい。

◆ 小林直樹会長

- 「我々はどこから来たか、我々は何か、我々はどこへいくか？」（ゴーギャン）
- 「人間よ、自己（自らの由来・本質・志望・義務・可能性・存在意味など）を知れ」
- 研究のキーワード：「欲望」「暴力」等

- ・ 人間学の面白さ・・・人間の矛盾的存在

◆ 小原秀雄会長

- ・ 自然「学」と人文・社会科学の接点・相互交流の追求
- ・ 人間を問う総合的基礎概念——「人間（ヒト）」
- ・ 研究のキーワード：「自己家畜化」「人間の〈自然さ〉」等
- ・ 目標「実践性を含みながら、高い学理を」

◆ 小原秀雄先生と私（尾関）の交流

私は、たまたま、若い頃に言語論で戸坂潤賞をもらったことが機縁で30代半ばに、日本科学者会議の「科学全書」の企画の一冊として依頼されて『言語と人間』（科学全書：1983年）という本を書いた。それは、言語起源、言語と意識、言語と疎外といった三つのテーマで、言語と労働の関係を軸に少しまとまった言語と人間に関するコンパクトな本であった。それは、コミュニケーションと労働の相互作用、人間本性の社会的共同性を強調するもので、小原先生の共感を得た。小原先生も同じ企画で『人（ヒト）に成る』（科学全書：1985年）という本を書かれた。私も一読して、「自己家畜化論」や「人間の〈自然さ〉」に大いに共感した。学生の頃以来、若きマルクスの『経済学・哲学草稿』に大きな影響を受けたこともあり、マルクスの「自然の社会化」や「人間主義と自然主義の統一」思想に関して、小原先生の議論はマルクスの哲学的アイデアを生物学的展開されているものとして理解され大きな共感をもった次第である。

それ以来、小原先生との交流があり、総合人間学会以外にも共生社会システム学会の設立や環境思想・教育研究会の設立にご援助をいただくこともあった。そういう長い付き合いの関係で小原先生から誘われて、先述の人間学研究所にも顔を出すようになり、そのまま総合人間学会の設立のメンバーの一人に至った次第である。

§3 設立記念集会

いよいよ学会の設立を前にしてできるだけ広範な人びとの関心を持ってもらうために、小林先生の提唱で学会設立記念集会を2006年5月27日に開催することになった。そして、以下のメンバーで講演・報告を行ったが、小柴昌俊さんと加藤周一さんに関しては、小林先生が当時において理系と文系を代表する知識人と考えられたお二人が登壇されたことは大きな意義があり、「大輪の文化の華」を添えることができたと書いて喜ばれている。

◆ テーマ「人間はどこへ行くのか」：小林直樹

1. 記念講演「テーマ」

講師1：小柴昌俊、講師2：加藤周一

総合人間学へ向けて：小原秀雄

2. シンポジウム「総合人間学は何を目指すか」

司会：佐藤節子（法哲学）
長野敬（生物学）、尾関周二（哲学）、
西郷竹彦（文芸学）、小尾信彌（天文学）

3. 設立総会

閉会の挨拶：柴田義松

- ◆ この設立記念集会では、「総合人間学」の必要性は以下のような諸点が強調された。
 - 1) 従来の「人間学」には、現代の諸科学と没交渉で、それらの知見を踏まえた問題意識に乏しい。
 - 2) 現代科学は専門化を進め大きな成果を収めているが、人間の総合的認識は欠如していくというパラドックス。
 - 3) 従来の「人間学」は、人類が直面しつつある「世界問題」（環境、戦争、人口、資源など）に真剣に取り組む姿勢がなかったが、こういった現実的問題との取り組みが必要。

なお、この内容は、私が編集委員長になって翌年発刊した学会誌『総合人間学1 人間はどこにいくのか』に掲載されている。（この設立直後の主要役員を記すと、会長：小林直樹、副会長：小原秀雄、編集委員長：尾関周二、同代行：長野敬、事務局長：岩田好宏であった。）

また、この東京の設立集会に呼応して同年12月21日に関西の京都でも学会設立の集会が持たれた。龍谷大学大宮キャンパスで行われ、水田洋氏（社会思想史）と小原秀雄副会長の講演と討論が行われた。

§4 学会設立の時代背景

これまで見たように、学会設立には、小林、小原両先生の意欲と情熱が大きかったわけであるが、時代背景も大きかったと思われるので、それを簡単にみておきたい。上記に述べてきた学会設立の準備から設立に至る20世末から21世紀初頭は文字通り「転換の時代」と呼ぶことができよう。そして、さらに言えば、下記の三つのレベルでの大転換の波の重層化があったといえる。

- 1) 戦後日本史（高成長から低成長へ）
- 2) 現代世界史（20世紀世界システムの転換）
- 3) 人類近代史（人類文明の転換）

こういった転換を年代毎の大きな括りで、諸事件を挙げてみたい。

1) 60年代末から70年代末へ

- ◆ 戦後日本の転換の波（高度成長から低成長へ）

5月革命(1968)、チェコ事件(68)、『苦海浄土』(69)、ベトナム戦争、文化大革命、万博(70)、沖縄復帰(72)、『成長の限界』(72)、石油危機(73、79)、太陽の塔(生命の樹は血流だ)

2) 80年代前半から90年代前半

◆ 現代世界の転換の波(グローバリゼーションと20世紀システムの崩壊)

福祉国家の危機、新自由主義、中曽根内閣(1982)、チェルノブイリ(85)、ブラックマンデー(87)、ベルリンの壁撤去(89)、バブル経済崩壊(90)、ソ連崩壊(91)

3) 90年代後半から21世紀へ

◆ 近現代文明の転換の波

阪神淡路大震災(1995)、9・11テロ(2001)、イラク戦争(03)、都市人口過半(08)、リーマンショック(08)、中国GDP2位(10)、東日本・福島原発大震災(11)

§5 設立趣意書をめぐって

「設立趣意書」を主に起草されたのは、小林直樹先生であった。この英文訳はオブヒュルス＝鹿島ライノルト会員と尾関が行った。

(1) 設立趣意書の特徴と私に思われたのは、以下の諸点である。

◆ 時代の転換と閉塞状況を強く意識

- ・環境破壊や大量虐殺などの人類の利己的姿への危機感
- ・現代の科学・技術の問題性への大きな関心
- ・遺伝子操作・・・「クローン人間」(神の領域)
便利な情報機器などの道具に振り回されている人間の姿

◆ 人類と文明を危うくしている

「世界問題」の解決の困難さ → 閉塞状況の根源

- ・問題の共通原因
人間の欲望と意志と活動
- ・真摯な自己認識と反省が不可欠

「汝自身を知れ」 → 総合人間学の要請

- ・”人間と世界”の全体像を得るための研究と討議の場 → 総合人間学会

(2) 私が、「設立趣旨書」ではあまりふれられていない論点と後に思ったのは以下の点である。

- 1) グローバル資本主義をはじめ「資本主義」という言葉が出てこない。また、一般に社会システム・構造の問題性への言及がほとんどない。私は、既存の社会システム・構造には既存の支配的な人間観があり、新たな社会変革を構想するためには、新たな人間観を考える必要があると考えていた。この「設立趣旨書」が作成

された頃には、まだソ連型社会主義の崩壊の影響が広く残っており、例のフランシス・フクヤマの「歴史の終わり」という言葉の残響があった。しかも、資本主義への懐疑や批判的意識が一举に広がったリーマンショック（2008年）がまだ起こっていなかったことも考慮する必要があるだろう。

- 2) 農村と都市の関係の問題
- 3) IT革命、ICT革命といった今日では「デジタル革命」と言われる動向に関してはほとんどふれられていない。

§6 新たな学会説明書（「総合人間学会趣旨新版（2019）」）の作成

「総合人間学会趣旨新版（2019）」が、学会設立から10数年経って、設立趣意書を発展させ今日の時代状況に見合う学会説明書の作成の必要性が出てきたと判断してとりまとめられた。尾関が最初の文案を書き、それに三浦永光理事、古沢広祐理事が加筆修正した。私の理解によれば、以下の諸点が設立趣意書にはなかった点である。

- (1) 「デジタル革命」の人類史的意味
 - 人工知能、ロボット、3Dプリンター、IoT等
 - 「労働」と「生活」を巡る大変化の可能性
- (2) リーマンショック以後
 - 「資本主義の限界」論の視点
 - 新たな社会システム・社会構造へ向けての人間観の探究

§7 私の未来展望の粗描

最後に、新版（2019）をふまえた私の未来展望について少しふれておきたい。

（詳しくは、2021年4月発刊の拙著『21世紀の変革思想へ向けて——環境・農・デジタルの視点から』を参照してほしい。この本はこの当時要点のみ述べたことの延長にあるといえる。従って、この章はごくごく簡単に記載するにとどめた。）

私見によれば、未来展望には人間-自然関係にかかわって二つのタイプへの分岐があると思われる。「デジタル革命」についても、この分岐にかかわってどう生かすかと深く関係している。

- (1) 自然克服型展望（超近代化志向）
 - ・ 近代主義（成長主義）一般
 - ・ 旧マルクス主義の生産力主義
 - ・ 新たな超近代科学技術主義

- ・レイ・カーツワイルの「シンギュラリティ」
- ・ハラリ『ホモ・デウス』（人工知能が全人類の知能を超える転換点）

(2) 人間自然共生型展望（脱近代化志向）

- ・共生型持続可能社会
- ・人間－自然共生型
- ・人間の〈自然さ〉

◆デジタル革命

・20世紀中頃から開始したコンピュータ、産業ロボット、インターネットなどの情報革命の連続化

21世紀前半、成熟期へ 人工知能、3Dプリンター、IoT、ビッグデータ

・「デジタル生産様式」（野口宏） = 脱機械制大工業

資本蓄積の停滞、ポスト資本主義へ

労働時間の大幅短縮、自由時間の増大に基づくコミュニティ経済へ

・「限界費用ゼロ社会」（リフキン）

（「限界費用」＝生産量を追加的に1単位増加したときの生産費用の増加分）

➡これもまた、資本蓄積の停滞に導くもの

➡情報インフラの共有を中心に 新たなコモンズ、「共有型経済」の形成

・「プロシューマー」（トフラー、リフキン）の登場

◆私（尾関）の人間学研究の系譜

私は自らの研究を振り返ってみると、人間学と社会理論を相互に関連付けて若い頃から研究してきたといえる。それで、ここでは人間学関連の研究を記しておきたい。

- ・『言語と人間』（1983）
- ・『哲学のリアリティーカント・ヘーゲル・マルクス』（1986）
- ・『遊びと生活の哲学』（1992）
- ・『環境と情報の人間学』（2000）
- ・『言語的コミュニケーションと労働の弁証法—現代社会と人間の理解のために』（2002）
- ・『環境思想と人間学の革新』（2007）
- ・『環境哲学と人間学の架橋』（2015）
- ・『こころの病は人生もよう』（2021）

【付記】

2021年4月25日に開催された「第15回研究大会ワークショップ」独立拡大オンライン研究会にて、報告の要望に応じて本論考をもとに作成した短いパワポにて報告をした。その際に出された質問や意見をもとに、正確と充実を期して本論考に一部訂正・加筆をした。この点で特に、岩田好宏会員には私の記憶違いの指摘と関連資料を送って頂いたことに感謝し

たい。

[おぜき しゅうじ／東京農工大学(名誉教授)／哲学]